

那須塩原市議会 建設経済常任委員会 行政視察報告書



視察期間：令和5年10月11日（水）～10月13日（金）

- 1 視察日：10月11日（水）
視察地：宮城県 石巻市役所
内 容：道の駅「上品の郷」について
- 2 視察日：10月12日（木）
視察地：岩手県葛巻町 くずまき高原牧場
内 容：「木質バイオマスガス化発電設備と畜ふんバイオマスシステム」について
- 3 視察日：10月13日（金）
視察地：青森県 八戸市役所
内 容：「八戸都市圏交流プラザ「8base」」について

建設経済常任委員会

委員長	大野 恭男	副委員長	小島 耕一
委員	山形 紀弘	委員	中村 芳隆
委員	星野 健二	委員	齋藤 寿一
委員	中里 康寛		

【随員：相馬和男、飯泉祐司】

道の駅「上品の郷」について

視察地 宮城県石巻市

視察日 令和5年10月11日

報告者 大野 恭男

石巻市の道の駅「上品の郷」は全国に1,204（令和5年2月28日現在）ある道の駅の中から、{じゃらん}全国道の駅グランプリ「満足度の高い道の駅」3年連続選出され令和3年度第5位、令和4年度第2位、令和5年度第8位の栄冠に輝いている施設である。那須塩原市においても、令和6年度に全面改装される道の駅「明治の森」において参考になる取組や運営、経営の手法を学ぶため、石巻市役所の河北総合支所地域振興課様より説明を受けその後、現地を視察した。

・道の駅の整備目的

平成15年12月に開通した三陸縦貫自動車道河北ICを有効的に活かし、農業や商業の再生と雇用の確保や交流人口の増大を図る為、経済・情報・交流拠点となる道の駅を「にぎわいの場」を創出する目的で整備した。

・整備内容

事業費・・・1,429,245千円

敷地面積・・・15,536㎡

延べ床面積・・・3602.19㎡

構造・・・木造（一部RC）平屋造り（地元木材を使用）

出資金・・・4,500万円（市89.2%）

地元農家1口株主5万円

・主要施設

（地域振興施設）

農産物等直売所「ひたかみ」・ヤマザキショップコーナー・フードコートの「ダ

イニングたまり場」・「食事処こばやし」がある。農産物直売所においては1口株主の地元農家が直接商品を運び入れ、商品の補充は問屋が行うとのこと。余ってしまった商品は問屋が改修するシステムを採用している。地元のブランド化（商品）として「上品の郷」じゃーん饅頭・生花・牡蠣コーラ・セリ鍋に入れるせり（河北セリ）がある。商品についての販売手数料は、平均すると約18%とのこと。また、商品を購入することにより自動的にふるさと納税につながるようにしているとところが魅力的である。



石巻市役所にて

（温泉保養施設）

温泉保養施設「ふたごの湯」は午前9時から午後9時まで営業している。食堂、リラクゼーション施設も備えており繁盛している。もともと農業・漁業の盛んな地域で仕事が終わりに利用したい地元住民の利用も多いとのこと。温泉に関しては、ふるさと創生事業の1億円を利用し、掘ったとのこと。温度は16度であり、沸かしているとのこと

（道路情報コーナー）

道路情報提供コーナーは勿論、無料休憩所（テーブルと畳を使用した和室）がありトイレにおいては担当職員もアピールしていましたが、年数を感じさせない

清潔なものである。駐車場においては大型台、普通車 231 台、身障者用 4 台、EV 車充電用 1 台あり週末はキャンピングカーの利用が多い。将来 RV パークを設置したいと考えているとのこと。

- ・指定管理の経緯

平成 17 年 3 月道の駅「上品の郷」の管理に関する協定締結（旧河北町と株式会社かほく・上品の郷）

平成 18 年 4 月石巻市道の駅「上品の郷」の管理に関する協定締結（石巻市と株式会社かほく・上品の郷）平成 22 年 3 月 31 日まで。

＊5 年毎に更新を行っている。

- ・道の駅「上品の郷」の運営

道の駅「上品の郷」を運営するために、株式会社かほく・上品の郷を第三セクターと設立し、指定管理者として運営している。株式会社かほく・上品の郷に副市長が取締役として就任し取締役会等に出席しているとのこと。

まとめとして、この道の駅「上品の郷」については平成 17 年度にオープンし約 18 年経過しているが老朽化を全く感じさせず、手入れが行き届いており気持ちよく利用できる場所、年間来場者数がコロナ感染の影響でここ 2 年減少しているが、コロナ前に戻りつつある。売り上げについても同じことがいえる。本年の指定管理料として約 1,600 万円の支出とのことであるが、昨年までは、ゼロとのこと驚きを隠せませんでした。この道の駅の最大の特徴は、温泉施設であると考えます。地域性を考えて何を目玉にするのか、しっかり考え赤字を出さない経営をしていくこと、満足せずに常にリニューアルしていくことの大切さを感じました。道の駅「明治の森」に期待したい。



道の駅上品の郷にて

道の駅上品の郷について

視察地 宮城県石巻市

視察日 令和5年10月16日

報告者 山形 紀弘

道の駅は日本国内における地方創生と地域経済の活性化に不可欠な施設として、重要な役割を担っている。道路利用者の安全と利便性の向上、地域特産品の販売促進、観光情報の提供など、多岐にわたる機能を持つ。しかし、時代の変化と共に、来場者数を維持・増加させるための新たな挑戦が求められている。

道の駅の課題点

①道の駅の来場者数の伸び悩み②施設間でのサービスの同質化、地域特色の不足③地方創生の観点から効果的な活用が見受けられない地域の存在などが取り上げられる。今後の展開としては、個性と地域性を更に生かしたサービスの提供、道の駅同士のネットワーキング強化による情報共有、エコツーリズムなど新しい観光の形態を取り入れた展開が必要になってくる。道の駅の役割の強化も重要で、地域交流拠点として機能を重視したイベントの企画や農産物直売所として更なる地域特産品のブランド化や差別化、地域文化を活かした体験型コンテンツの充実が望まれる。

道の駅の役割再考

道の駅は、地域産業の振興はもとより、文化的な集いの場や情報発信基地としての役割も担っている。この多角的な機能を活かすためには、①地域文化のプラットフォームとして地域の伝統文化や芸能を紹介し文化継承の場として役割を果たす。②地産地消の促進として地元農産物を活

かした食品開発や食のイベントと通じて地産地消に推進を図ることが重要である。

上品の郷の事例に見る成功要因

宿泊施設の導入・キャンピングカーや車中泊を可能にする駐車場を提供することで、長距離運転者や観光客に対して新たな選択肢を提供した。これは滞在型観光の推進と地域経済への波及効果をもたらしている。②温泉施設の組み込み・訪問者に対してリラクゼーションを提供することで、道の駅を一時的な休憩所から目的地として変えることに成功している。③地元との連携強化・地元農家や企業との連携を深め、地域製品の品質保持と新商品開発に努めることで、道の駅独自のブランド価値を高めている。

結論と提案

「道の駅」は地域の顔として、また地域経済の活性化の担い手として多くの可能性を秘めています。そのためには、地域資源を最大限に活用し、施設ごとの独自性を強化することが不可欠です。上品の郷の事例から学ぶことは多く、その経験を他の道の駅に適応させることで、全国の「道の駅」が抱える課題を克服し、新たな来場者層を獲得することが期待されます。未来への展開としては、地域と連携したイベントの定期開催、独自ブランド商品の開発、SNSを活用した情報発信の強化などを推奨します。これらの取り組みを通じて、「道の駅」が各地域の文化、経済、社会の中核としてさらなる発展を遂げることを期待します。次年度リニューアルオープン予定、道の駅明治の森・黒磯では様々な情報発信を駆使して差別化を図り、もう一度訪れたい道の駅として顧客満足度を上げて素晴らしい施設になることを期待したい。

テーマ 木質バイオマスガス化発電施設と畜糞バイオマスシステムについて

視察地 岩手県 葛巻町

視察日 令和5年10月12日(火)

報告者 小島 耕一

葛巻町の概要

岩手県の北東部に位置し、人口 5,510 人、面積 434 平方キロの面積を有し、北緯 40 度にあるミルクとワインとクリーンエネルギーの町である。クリーンエネルギーでは、風力発電を中心に太陽光発電や家畜排泄物や間伐材を活用したバイオガス発電を導入し、電力自給率 360% を誇っている。



クリーンエネルギーの取組について

○畜ふんバイオガスプラント

稼働年 平成 15 年 出力 37 k w

原料 仔牛のふん尿、生ごみ



出力が 37 k w と小さく、売電はせずに、自家消費である。畜ふん尿に加えて、生ごみを利用しているのが特徴である。生ごみは各家庭にバケツを配り、それを集めてバイオガスプラントの原料にし

ており、プラントから発生する消化液は肥料として草地に還元されており、リサイクルが徹底されている。



○木質バイオマスガス化発電設備

稼働年 平成 17 年

出力 120 k w

バイオマス等未活用エネルギー実証試験事業で導入した。町の面積の 84.6% が森林であり、間伐材が山林に放置されていることから実証試験に取り組んだ。月島機械(株)の取組を支援し、発電に関する実証を行ったが、発電量が少ないことから、現在は運転を休止している。



○風力発電

・エコワールドくずまき風力発電所(H11年)

出力 1200kw

総事業費 34.4 億円

・グリーンパワーくずまき風力発電所(H15年)

出力 21000 k w 総事業費 47 億円

・グリーンパワーくずまき第2風力発電所(R2)

出力 44600kw

クリーンエネルギーの中心で、高原に吹く風をエネルギーに変えようと 34 基の風車を導入している。総出力では 65,600kw で一般家庭が使う消

費電力約 50,000 世帯分の電力を生産している。

○太陽光発電

町内の小中学校、公共施設等に 45 か所の太陽光発電設備が設置されている。総出力は 897kw になり、蓄電池も導入し、有事の際の無停電に取り組んでいる。

所感

葛巻町は、岩手県でもトップクラスの酪農の盛んな町であり、当時の高橋吟太郎町長が昭和 49 年から北上山系農用地開発事業に取り組み、1100ha の牧草地造成を皮切りに様々なプロジェクトを進めた。この取組は「株式会社葛巻町の挑戦」と題して本にもまとめられている。

キャッチフレーズである「ミルクとワインとクリーンエネルギーのまち」にも表されているとおりミルクとワインを特産物にクリーンエネルギーを進めている。

本市でもミルクとワイン、クリーンエネルギーを推進しているところでありその取組は大変参考になった。中でも、畜ふんバイオアガスプラントでは規模は小さいが、家庭用の生ごみを収集し、発電に利用しており、リサイクルも徹底していることから本市でも導入を検討してはと思った。

この他、やまぶどうを使ったワインについても、一時期、負債が増加して危機的状況であったが、鈴木重男(現町長)氏は、ワインの品質改善やマーケティングに努力して、黒字にすることができた。人口減少の進んだ町において、町の存続をかけて生産力を維持しようとする強い心意気を感じることもできた。



木質バイオマスガス化発電設備と畜ふんバイオマスシステムについて

視察地 岩手県葛巻町

視察日 令和5年10月12日

報告者 星野 健二

葛巻町は、岩手県北部の内陸部に位置し、人口 5,510 人、世帯数 2,656 世帯、面積 434.96 km² (2023.4.1 現在)。町の面積の 86%が森林であることから林業もさかんである。昭和 30 年の 3 町村の合併時では 16,000 人いた人口も年々減少していった。葛巻町は、岩手県内では広い土地を有しているがスキー場やゴルフ場や温泉などの観光資源がなく雇用創出のために地域の自然を最大限に活かすことが大切と考え、酪農と林業の振興に重点を置いた。明治 25 年からホルスタイン種の飼育を開始し、昭和 50 年代の大規模牧場開発事業を経て、現在では東北一の酪農王国となっている。森林の伐採地には寒さに強いカラマツを植林し林業の再生にも取り組んだ。また、当初は木に絡まっているヤマブドウのつるの処理に困っていたが、発想転換をしてヤマブドウからワインを製造することを始め、第三セクターによる地域の活性化の一環としてワイン製造・販売にも力をいれている。

葛巻町は、平成 7 年に葛巻町自然環境保護条例を制定し、「自然とともに豊かに生きる町」の宣言を行い、新エネルギー導入を積極的に展開し地域資源を活用した町の魅力づくりへの取り組みを始める。平成 11 年には、「葛巻町新エネルギービジョン」を策定し、当町の基幹産業である農業・林業に付加価値を付ける取り組みを始め、平成 15 年に葛巻町省エネルギービジョンを策定した。

●畜ふんバイオマスガスシステム

平成 15 年 6 月稼働。

牛舎から運ばれてくる家畜排泄物を個液分離機により液体と固体に分離し、個体はたい肥化の施設で乾燥させる。液体はメタン発酵槽に保存し、発生したメタンガスを燃焼させエネルギー化する。また、町内(1,000 世帯)の生ゴミも家畜排泄物と同様に処理している。このシステムにより、エネルギー(電気・熱)と良質な肥料を生産し、理想的な循環サイクルが完成している。

- ・事業名 生産振興総合対策事業
- ・出力 電気 37kW 熱 180MJ
- ・総事業費 2 億 2,000 万円(補助金あり)

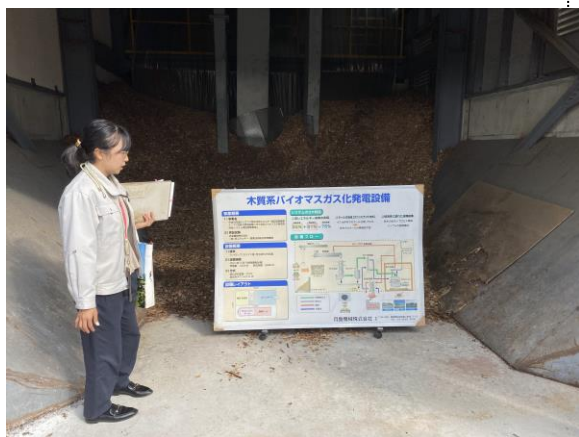


●木質バイオマスガス化発電設備

平成 16 年度～平成 20 年度稼働

町の面積の 86%を占める森林から、年間 8,500 m³もの間伐材が発生しているが、その内 8 割は山林に放置されている状況であり、これを有効利用するため、ガス化発電による熱電供給システムの実証実験が行われた。このシステムは間伐材を原料とし、熱と電気を有効利用できるため、地球温暖化防止への貢献はもちろんのこと、森林の適正な管理を行うことで、低迷が続く林業の新しいビジネスモデルの構築が可能であると考えられている。

- ・事業名 バイオマス等未活用エネルギー実証試験事業
- ・出力 電気 120 kW 熱 958MJ
- ・事業費 2 億 3,000 万円(補助金あり)



所見

葛巻町は町全体として、各分野へのエネルギー導入へ積極的に取り組んでおり、クリーンエネルギーの自給率は 360%と高いことを評価したい。ただ、町民は実際には電力会社から電力を買っている。今後は、地域にとってメリットがあるクリーンエネルギーの活用を進めることが必要だと思った。本市においても持続可能な脱炭素社会をさらに構築するには、葛巻町の取り組みは大変に参考になった。

八戸都市圏交流プラザ「8base」について

視察地 青森県八戸市
視察日 令和5年10月13日
報告者 中里康寛・中村芳隆
齋藤寿一

八戸都市圏交流プラザ「8base」は、東京都にある商業施設「日比谷OKUROJI」内（株式会社ジェイアール東日本都市開発が、JR有楽町駅から新橋間の高架下空間を活かし、再開発を行った商業施設）に開業したアンテナショップである。運営主体は、八戸市であるが、八戸圏域8市町村による連携中核都市圏事業として実施している。

設置目的は、（１）地域製品の認知度を高め、販路拡大をする。（２）継続的に地域を応援してくれる関係人口を増やす。

（３）観光誘客、移住・UIJターンを促進することである。具体的なアンテナショップの機能としては、八戸圏域の食材を活用した食事の提供及び地場産品を販売、また地域の魅力に触れることができる交流会やイベントを開催している。

令和2年9月に開業し、約2年間で50万人が来店している。売上については、
令和2年度 約4,410万円
令和3年度 約3,620万円
令和4年度 約9,170万円

売上構成は、約7割が旬の食材を活用した料理やご当地グルメなどの飲食売上、約3割が海産物や農畜産物の各種加工食品などの物販売上となっている。

イベント等については、令和4年度まで21回、計228人が参加しており、継続的に地域を応援してくれる八戸圏域のファンづくりや観光誘客、将来的な移住・定住等につなげるための交流会を開

催している。

整備に係る事業について

・一般財源 10/10

物件賃借に係る敷金 約2,000万円

・地方創生交付金（補助率 1/2）を活用
プロモーション戦略策定業務委託 約1,000万円

実施設計業務委託 約600万円

物件仲介料 約230万円

現場共益費 約100万円

設計監理業務委託 約660万円

内装業務委託 約1億1,730万円

敷金は、賃貸契約期間満了時に市へ返還される。

運営に係る事業費について

・事業者負担

光熱水費 約357万円

・一般財源と事業者負担

テナント賃借料 約2,919万円

・一般財源 10/10

旅費 約56万円

WEBサイト保守管理委託業務 約54万円

内装業務 約99万円

・青森県支援事業補助（補助率 2/3）

交流事業業務委託 約407万円

ブランディング推進事業業務委託 約231万円

プロモーションイベント業務委託 約241万円

8base活用推進補助事業 約72万円

広報プロモーション業務委託 約130万円

（中里康寛）



八戸市役所にて

地場産品の認知向上と関係人口の形成、増加を目指すとともに、UIJ ターンによる移住、定住等を促進する為の首都圏交流拠点として、八戸都市圏交流プラザ「8ベース」を設置し、統合的なプロモーションを実施。

一般的なアンテナショップとの差別化を図り、八戸圏域ならではの食の魅力を通じて交流を促す為、飲食機能を強化されている。

運営の主体は八戸圏域 8 市町村による連携中枢都市圏事業として実施され、運営事業者は株式会社金剛が行っている。

令和 2 年 9 月にオープンし、下半期の実績は 44,000,000 円強、令和 3 年度は 36,000,000 円強、令和 4 年度は 91,000,000 円強となり、令和 5 年度は上半期で 55,000,000 円強と、新型コロナが 2 類から 5 類へと移行する事により営業実績は上がっている。

尚、令和 5 年度は当初目標としていた 100,000,000 円を超える見通しとの事である。内訳としては、八戸圏域の海の幸と山の幸をふんだんに使った創作郷土料理と地酒を堪能。定番のものから地元ならではの個性的なものまで各種お土産にラインナップされ、飲食部間で約 70%、物販部門で約 30%の実績となっている。また、令和 5 年 5 月末時点で、来客数が延べ 70 万人を突破するなど、初期の目的である「地場産品の認知向上」や「関係人口の増加」には、多大な実績を上げているが、圏域の移住定住を促進する為、移住相談窓口を開設してきたが、移住者は 1 件の実績もないという課題に直面していることは残念である。

本市においても、八芳園との協定による地場産(ブランド品)の活用による「食」

に関する取り組みや、首都圏における交流人口の増加を図り、那須塩原ライフ実現の為に取り組んでいる施策の中で、八戸圏都市交流プラザ 8 ベースの取り組みは大いに勉強になりました。本市のまちづくりの中で参考にさせていただきたいと思う。(中村芳隆)



八戸市議場にて

八戸都市圏交流プラザ【8base】は令和 2 年 9 月 10 日、J R 有楽町駅から新橋駅間の高架下空間を活用したエリア〔日比谷 o k u R o J I〕内にオープンした施設です。

店内には日本一脂の乗った〔八戸前沖さば〕の缶詰や、〔南部せんべい〕などの物産販売の他その希少さから幻と言われる田子産黒毛和牛種である〔田子牛〕や宮内庁御用達地鶏〔青森シャモロック〕を使ったお食事に加え、青森県外で味わえるのは 8 b a s e だけという新郷村産ミルクを使った特濃ソフトクリームを提供するなど地場産の売出しに力を入れていることが感じ取れた。また、はちのへエリアのファンづくりや移住・u I ターンを促進するための各種交流イベントを開催することもでき、一般的なアンテナショップとは違った役割を持つ施設であり物を売るだけの施設にはしていないことに感動した。

はちのへエリアの地域産品の認知度を高め、販路拡大を図りながら、継続的に地域を応援してくれる関係人口を増やすため、総合的なシテイープロモーションの核を担っている。

はちのへエリアと離れたところにいても、はちのへエリアの情報を知ることができるように、LINE公式アカウント〔スクラム8〕を開設しており、スクラム8では、8b a s eの最新のイベント情報の他はちのへエリアのさまざまな情報も随時配信しており、故郷を応援したい方、出身地ではないけれどもこの地域のことをもっと知りたい方など、どなたでも簡単に登録できLINEの活用により関係人口を増やしていることに感銘した。

（齋藤寿一）